

## 一房の葡萄

有島武郎

### [※パート 1]

僕は小さい時に絵を描《か》くことが好きでした。僕の通《かよ》っていた学校は横浜《よこはま》の山《やま》の手《て》という所にはありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行きかえりにはいつでもホテルや西洋人の会社などがならんでいる海岸の通りを通るのです。通りの海添いに立って見ると、真青《まっさお》な海の上に軍艦だの商船だのが一ぱいならんできて、煙突から煙の出ているのや、檣《ほぼしら》から檣へ万国旗をかけわたしたのやがあつて、眼がいたいように綺麗《きれい》でした。僕はよく岸に立ってその景色《けしき》を見渡して、家《いえ》に帰ると、覚えているだけを出るだけ美しく絵に描《か》いて見ようと思いました。けれどもあの透きとおるような海の藍色《あいいろ》と、白い帆前船などの水際《みずぎわ》近くに塗ってある洋紅色《ようこうしょく》とは、僕の持っている絵具《えのぐ》ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても本当の景色で見るような色には描けませんでした。

ふと僕は学校の友達の持っている西洋絵具を思い出しました。その友達は矢張《やはり》西洋人で、しかも僕より二つ位齡《とし》が上でしたから、身長《せい》は見上げるように大きい子でした。ジムというその子の持っている絵具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種《いろ》の絵具が小さな墨のように四角な形にかためられて、二列にならんでいました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と洋紅とは喫驚《びっくり》するほど美しいものでした。ジムは僕より身長《せい》が高くせに、絵はずっと下手《へた》でした。それでもその絵具をぬると、下手な絵さえがなんだか見ちがえるように美しく見えるのです。僕はいつでもそれを羨《うらやま》しいと思っていました。あんな絵具さえあれば僕だって海の景色を本当に海に見えるように描《か》いて見せるのになあと、自分の悪い絵具を恨みながら考えました。そうしたら、その日からジムの絵具がほしくてほしくてたまらなくなりました。けれども僕はなんだか臆病《おくびょう》になってパパにもママにも買って下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思いつづけるばかりで幾日か日がたちました。

今ではいつの頃《ころ》だったか覚えてはいませんが秋だったのでしょう。葡萄《ぶどう》の実が熟していたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように空の奥の奥まで見す

かされそうに霽《は》れわたった日でした。僕達は先生と一緒に弁当を食べましたが、その  
楽しみな弁当の最中でも僕の心はなんだか落ち着かないで、その日の空とはうらはらに暗かっ  
たのです。僕は自分一人で考えこんでいました。誰《たれ》かが気がついて見たら、顔も屹  
度《きっと》青かったかも知れません。僕はジムの絵具がほしくてほしくてたまらなくな  
ってしまいましたのです。胸が痛むほどほしくてしまったのです。ジムは僕の胸の中で考  
えていることを知っているにちがいないと思って、そっとその顔を見ると、ジムはなんにも  
知らないように、面白そうに笑ったりして、わきに坐《すわ》っている生徒と話《はなし》  
をしているのです。でもその笑っているのが僕のことを知っていて笑っているようにも思え  
るし、何か話をしているのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の絵具を取るにちがいないから。」  
とっているようにも思えるのです。僕はいやな気持ちになりました。けれどもジムが僕を  
疑っているように見れば見えるほど、僕はその絵具がほしくてならなくなるのです。

僕はかわいい顔はしていたかも知れないが体《からだ》も心も弱い子でした。その上臆病  
者《おくびょうもの》で、言いたいことも言わずにすますような質《たち》でした。だから  
あんまり人からは、かわいがられなかったし、友達もない方でした。昼御飯がすむと他《ほ  
か》の子供達は活潑《かっぱつ》に運動場《うんどうば》に出て走りまわって遊びはじめま  
したが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけ教場《きょうじょう》に這入  
《はい》っていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなって僕の心の中のような  
自分の席に坐《すわ》っていながら僕の眼は時々ジムの卓《テーブル》の方に走りました。  
ナイフで色々ないたずら書きが彫りつけてあって、手垢《てあか》で真黒《まっくろ》にな  
っているあの蓋《ふた》を揚《あ》げると、その中に本や雑記帳や石板《せきばん》と一緒  
になって、飴《あめ》のような木の色の絵具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨  
のような形をした藍や洋紅の絵具が……僕は顔が赤くなったような気がして、思わずそっぽ  
を向いてしまうのです。けれどもすぐ又《また》横眼でジムの卓《テーブル》の方を見ない  
ではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しい程《ほど》でした。じっと坐  
っているながら夢で鬼にでも追いかけられた時のように気ばかりせかせかしていました。

教場に這入《はい》る鐘がかんかんと鳴りました。僕は思わずぎょっとして立上りました。  
生徒達が大きな声で笑ったり唝鳴《どな》ったりしながら、洗面所の方に手を洗いに出かけ  
て行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いな  
がら、ふらふらとジムの卓《テーブル》の所に行って、半分夢のようにその蓋を揚げて見  
ました。そこには僕が考えていたとおり雑記帳や鉛筆箱とまじって見覚えのある絵具箱がし

まっぴゃあありました。なんのためだか知らないが僕はあっちこちを見廻《みまわ》してから、誰も見ていないなと思うと、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二色《ふたいろ》を取上げるが早いポケットの中に押し込みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走って行きました。

## [※パート2]

僕達は若い女の先生に連れられて教場に這入り銘々の席に坐りました。僕はジムがどんな顔をしているか見たくってたまらなかつたけれども、どうしてもそっちの方をふり向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も気のついた様子がないので、気味が悪いような、安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生の仰《おっしゃ》ることなんかは耳に這入りは這入ってもなんのことだかちっともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕は然《しか》し先生の眼を見るのがその日に限ってなんだかいやでした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思いながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴ったので僕はほっと安心して溜息《ためいき》をつきました。けれども先生が行ってしまうと、僕は僕の級《きゅう》で一番大きな、そしてよく出来る生徒に「ちょっとこっちにお出《い》で」と肱《ひじ》の所を掴《つか》まれていました。僕の胸は宿題をなまけたのに先生に名を指《さ》された時のように、思わずどきんと震えはじめました。けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならないと思って、わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場《うんどうば》の隅《すみ》に連れて行かれました。

「君はジムの絵具を持っているだろう。ここに出し給《たま》え。」

そういつてその生徒は僕の前に大きく拵《ひろ》げた手をつき出しました。そういわれると僕はかえって心が落ち着いて、

「そんなもの、僕持ってやしない。」と、ついでたらめをいってしまいました。そうすると三四人の友達と一緒に僕の側《そば》に来ていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つも失《な》くなくなつてはいなかつたんだよ。そして昼休みが済んだら二つ失くなくなつていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは君だけじゃないか。」と少し言葉を震わしながら言いかえしました。

僕はもう駄目《だめ》だと思うと急に頭の中に血が流れこんで来て顔が真赤《まっか》になったようでした。すると誰だったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手

をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢《たぜい》に無勢《ぶぜい》で逆《とて》も叶《かな》いません。僕のポケットの中からは、見る見るマール球《だま》や鉛のメンコなどと一緒に二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見ろ」といわんばかりの顔をして子供達は憎らしそうに僕の顔を睨《にら》みつけました。僕の体《からだ》はひとりでにぶるぶる震えて、眼の前が真暗《まっくら》になるようでした。いいお天気なのに、みんな休時間を面白そうに遊び廻っているのに、僕だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなぜしてしまったんだろう。取りかえしのつかないことになってしまった。もう僕は駄目だ。そんなに思うと弱虫だった僕は淋《さび》しく悲しくなって来て、しくしくと泣き出してしまいました。

「泣いておどかしたって駄目だよ。」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような憎みきったような声で言って、動くまいとする僕をみんなで寄ってたかって二階に引張って行こうとしました。僕は出来るだけ行くまいとしたけれどもとうとう力まかせに引きずられて階子段《はしごだん》を登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持ちの先生の部屋《へや》があるのです。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは這入《はい》ってもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「お這入《はい》り」という先生の声が聞えました。僕はその部屋に這入る時ほどいやだと思ったことはまたとありません。

何か書きものをしていた先生はどやどやと這入って来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女の癖に男のように頸《くび》の所でぶつりと切った髪の毛を右の手で撫《な》であげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、一寸《ちよっと》首をかきあげただけで何の御用という風をなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことを委《くわ》しく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真面目《まじめ》にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか。」と聞かれました。本当なんだけれども、僕がそんないやな奴《やつ》だということをどうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったのです。だから僕は答える代りに本当に泣き出してしまいました。

先生は暫《しばら》く僕を見つめていましたが、やがて生徒達に向って静かに「もういつでもようございます。」と行って、みんなをかえしてしまわれました。生徒達は少し物足らなそうにどやどやと下に降りていってしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立って来て、僕の肩《かた》の所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返し

ましたか。」と小さな声で仰《おっしゃ》いました。僕は返したことをしっかり先生に知ってもらいたいので深々と頷《うなず》いて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだったと思っっていますか。」

もう一度そう先生が静かに仰った時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇《くちびる》を、嚙《か》みしめても嚙みしめても泣声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

### [※パート3]

「あなたはもう泣くんじゃない。よく解《わか》ったらそれでいいから泣くのをやめましよう、ね。次ぎの時間には教場に出ないでもよろしいから、私《わたくし》のこのお部屋に入らっしゃい。静かにしてここに入らっしゃい。私が教場から帰るまでここに入らっしゃいよ。いい。」と仰りながら僕を長椅子《ながいす》に坐《すわ》らせて、その時また勉強の鐘がなったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高く這《は》い上《あが》った葡萄蔓《ぶどうづる》から、一房《ひとふさ》の西洋葡萄をもぎつて、しくしくと泣きつづけていた僕の膝《ひざ》の上にそれをおいて静かに部屋を出て行きなさいました。

一時《いちじ》がやがやとやかましかった生徒達はみんな教場《きょうじょう》に這入《は》い《て》、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋《さび》しくって淋しくってしょうがない程《ほど》悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと僕は本当に悪いことをしてしまったと思いました。葡萄《ぶどう》などは連《とて》も喰《た》べる気になれないでいつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさました。僕は先生の部屋《へや》でいつの間にか泣寝入りをしていたと見えます。少し瘦《や》せて身長《せい》の高い先生は笑顔《えがお》を見せて僕を見おろしていられました。僕は眠ったために気分がよくなって今まであったことは忘れてしまって、少し恥しそうに笑いかえしながら、慌《あわ》てて膝の上から這《すべ》り落ちそうになっていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して笑いも何も引込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしないでよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたはお帰りなさい。そして明日《あす》はどんなことがあっても学校に来なければいけません

よ。あなたの顔を見ないと私《わたくし》は悲しく思いますよ。屹度《きっと》ですよ。」

そうって先生は僕のカバンの中にそっと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺《なが》めたり船を眺めたりしながらつまらなく家《いえ》に帰りました。そして葡萄をおいしく喰べてしまいました。

けれども次の日が来ると僕は中々学校に行く気にはなれませんでした。お腹《なか》が痛くなれば良いと思ったり、頭痛がすれば良いと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家《いえ》は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門を這入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんといっても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は屹度悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事《ひとこと》があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、先《ま》ず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日《きのう》のことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいてどぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を見て「見ろ泥棒のうそつきの日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのにこんな風にされると気味が悪い程《ほど》でした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸を開けて下さいました。二人は部屋の中に這入りました。

「ジム、あなたはいい子、よく私《わたくし》の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰《もら》わなくってもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手《じょうず》に握手をなさい。」と先生はにこにこしながら僕達を向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそとぶら下げている僕の手を引張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなんといつてこの嬉《うれ》しさを表せばいいのか分からないで、唯《ただ》恥しく笑う外《ほか》ありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、

「昨日《きのう》の葡萄《ぶどう》はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真赤《まつか》にして「ええ」と白状するより仕方ありませんでした。

「そんなら又あげましようね。」

そういつて、先生は真白《まっしろ》なリンネルの着物につつまれた体《からだ》を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真白《まっしろ》い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の鋏《はさみ》で真中《まんなか》からぷつりと二つに切って、ジムと僕とに下さいました。真白い手《て》の平《ひら》に紫色の葡萄の粒が重って乗っていたその美しさを僕は今でもはっきりと思い出すことができます。

僕はその時から前より少しい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

それにしても僕の大好きなあの子の先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇《あ》えないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。